

El Protagonista

La entrevista con corredores



宮崎泰史

宇野宮ブリツェン

「新リーグから飛び出した逸材」

2021年、新たなプロロードレースリーグのJCLが発足。日本のトッププロが車輪を奪い合うレースの最前線に割って入った宮崎泰史。競技歴わずか3年でトップ戦線に並んだ彼にプロtagonistaはフォーカスした

Vol. 76

名も知られぬ若者が レースファンを驚かさず

2021年8月8日JCLロードレースツアー大分大会。前大会の広島では新城雄大の優勝を筆頭に4位までを独占したキナンレーシングチームの快進撃は止まらず、この日もレースの主導権を握っていた。

ハイトルクを強いられる上りを抜けた後に設置された中間スプリントポイントを越えた直後、彼らの強引なスピードアップでフロントは崩壊。早くもレースのフロントに残るのは一部トップチームの複数人と各チームのエース選手20人程度に絞られていた。

横なぐりの雨が強くなり、選手たちの表情にも疲労が隠せなくなってくる頃、一人鋭いアタックを繰り返すブルージャージがカメラのファインダーに飛び込んできた。当時スパークルおおいに所属していた宮崎泰史だった。まだ名も知られぬ彼の地元大分の新興チームのプライドをかけた覇気ある走り。それは見る者の心を熱くし、引きつけた。

そしてその並外れた能力は、続く秋吉台カルストロードレースで多くのファンを驚かせることになる。広大な丘を舞台にしたレースは序盤から飛び出した

5人の選手がリードを奪うことに。スパークルおおいは孫崎大樹をこの逃げに乗せチームとして脚を温存。

終盤まで続いたこのエスケープが吸収されると各チームのトップクライマーが一斉に集結。山頂のゴール目掛けての大会戦となる。この混戦を制したのはキナンレーシングチームの山本大喜。

そして彼から4秒後、次に山頂に現れたのは死力を尽くし強豪を振り切った宮崎だった。日本のプロロードレース界に22歳の新星が現れた。この活躍が彼の人生を大きく変えることになっていく。

レースで気づいた 驚くべき適性能力

「今でこそ我慢、根性とかいう言葉が好きですが、これは自転車競技に出会ってからの話。それまでは小・中学生のときに野球をやっていたぐらいで、スポーツをガチガチにやるような少年でもなかったんです」

熊本県宇城市、街から少し離れた田舎町。一面に広がる畑を見守る小野野豊野神社の神主の家に育った宮崎泰史。ロードバイクに出会ったのは高校3年、塾へ通学するために購入したのがきっかけだった。そしてロードレースとの縁は2018年、

デビュー戦でつかんだ全日本選手権 レースのたびに周囲を驚かせる活躍



1/JCL開幕戦であるカンセキ真岡芳賀ロードレースで強力な牽引力を発揮しチームの勝利に貢献した。レース直後その働きぶりを笑顔で振り返る増田選手と宮崎選手 2/絞られたトップグループでも果敢にアタックしレースを動かす宮崎選手。地元大分のプライドをかけて戦った2021年JCL大分大会。彼の快進撃はここから始まった 3/JCLカンセキ宇都宮クリテリウム。重要な場面でレースをリードするなど、プロ2年目ながらさまざまな動きに対応できる力強さを見せた

大分の大学にロードバイクで通っている途中でデイレイラーが故障し津末サイクルを訪れたのがきっかけだった。カーボンの本格的なバイクがそろう店で、店長のロードレース話を聞くうち次第に「レースに出たい！」と感化されたという。

こうして、過去ミヤタレーシングのプロ選手として活躍した津末浩平氏に出会ったことで宮崎のロードレース人生は始まった。彼の練習会に参加し数カ月後、デビュー戦となったのは広島森林公園を舞台にした西日本チャレンジロードU23（2019年3月開催）だった。「冷たい雨のなか、レースっ

て怖いなあ、寒いなあ」と展開もわからずに『とにかく前にいろ』という津末さんの指示のもとガムシャラに走りました」

結果は4位。関西地区の登竜門的な大会でのいきなりの入賞しかし当時の本人はその実感もなままだ師匠の津末氏の出走するマスターズを観戦、日大時代に同期であった元日本チャンピオン谷泰治（現愛三工業監督）とともに飛び出した彼の走りに感激していた。

「自分の入賞より『津末さんがプロのロードレースチームの監督と知り合いなんです！』という方が印象深かった記憶です（笑）」

そしてこの入賞により全日本選手権ロードとTTの資格を手に入れたことで、宮崎の競技人生は急激に進展していく。3カ月の後の全日本に向けていくつものレースで経験を積み、型落ちで特価になったTTバイクを手に入れて挑んだ全日本選手権タイムトライアルU23で宮崎はトップの今村駿介（チームブリヂストン）から2分17秒遅れの6位入賞を果たす。今村は同世代でも世界選手権優勝を始め数々の実績を残す日本のトップランカー、日本一を決める舞台での高い潜在能力が証明された。「これは自分に適性のあるスポーツだ」

実業団連盟主催のJエリートツアーにも参戦。西日本ロードクラシック3位、椿ヶ鼻ヒルクライムで優勝を果たしトップクラスタのE1に昇格。

ロードレースの面白さにのめり込んだ宮崎は朝に練習、昼に大学で航空宇宙工学を勉強、夕方から夜中にパチンコ屋でアルバイトという生活を送り、自らの遠征費を稼いだし

た。そして意気込んで臨んだ翌シーズン、4月のJエリートツアー群馬3連戦で総合3位となるが、新型コロナウイルスの脅威が日本を襲ったことでレース開催自体がほとんどなくなってしまっ。しかしレースがなくなったことで、この大分の大学生に新たなチャンスが訪れる。

ある日、コロナ渦で地元大分に帰省した黒枝兄弟と練習する機会に恵まれた。日本のトップスプリンターとして名が知られていた2人と走ったことで、逆に彼らが宮崎の実力に目を留めた。そして後にスタートする新チーム構想「スパークルおおいた」の立ち上げメンバーに誘われることに。「大学4年目前の急展開でしたが、津末さんと相談し入団を決



十数戦のレース経験で、日本トップ勢の一角に食い込んだ2021年JCL秋吉台カルストロードレース

「意しました」その言葉どおり、2021年時を同じくして立ち上がった日本のプロリーグJCLの幕開けとともに宮崎泰史はスパークルおおいたでプロデビューを果たした。そして冒頭にも述べた快進撃。彼の活躍には競技に出合う前から結果と向き合い状況を

変えてきた人生があった。

ミニマリスト？

少し変わった宮崎の哲学
「自分は多くの情報やモノを必要としない性格なんです」。世間の流行に多感な学生時代でもSNSやテレビをほとんど見ない質素な生活に充実感を得てき



た宮崎。そのことは勉強にもプラスに働いた。

「必要最小限な情報だけで生きてきた分、勉強で知識を入れるのには容量が多かったみたいですよ」と語る宮崎は、国立大受験を目指してセンター試験で高得点を取り、日本文理大学から特待進学の話を受け取る。

「学費が免除されるなら親に負担もかけずに済む」と航空宇宙工学科に進学したものの、じつは在学中すべての教科成績で8割上位を修めなければ学費免除を毎年更新できないという厳しい環境だった。しかしそれでも彼は4年間この条件をクリアし続けた。

「自分の環境をよくするには結果を残すことだ」と学んだ宮崎。不得意な科目に向き合っって穴を埋めていく努力。こうした経験

こそが、ロードプロへの歩みのなかで平地から上りまで高い能力で走れる選手へと自身を成長させた。

大学卒業まであと1年、彼が次に目指したのがレースで結果を残すこと。つまり「自転車で食べていける環境」をつかむことだった。

「大学での成績は残してきたので就職先は選べる状況。大学最後のシーズンの先に自転車専業で生きられる形にならないければ就職してレースは引退することを決めていました」

とはいえ新型コロナウイルスの真つただなかでレース数も少なく、競技経験もなかなか積めずにチームのアシストを学びながら脚をアピールする機会は限られていた。そして大学卒業まで半期に迫った夏休み、彼が目指したの

は脚質的にも近く、憧れの対象だった阿部高之選手が所属する宇都宮ブリッツェンだった。

「厳しい練習に打ち込み9月の秋吉台ロードで2位となった時にこそ清水監督に打診しましたが、いい返事はもらえませんでした……」

やがてタイムリミットを迎え、諦めて一般企業に就職を決めようとしていた10月直前に一本の電話が掛かる。宇都宮ブリッツェンの清水裕輔監督からだった。「津末さんが選手時代に同期だった清水監督や、ミヤタ時代に同僚だった増田選手を通じて、自分のことをつないでくれたみたいですよ」。

事態は急展開、一転して「自転車選手を続ける」と家族へ連絡をとると「自分で決めた人生なんだから、気をつけて走って

きなさい」と暖かくエールを贈ってくれた。

こうして2022年、宮崎泰史はプロ2年目にしてトッププロチーム宇都宮ブリッツェンの赤いジャージに袖を通し、晴れてその一員となった。

恩師への感謝はレースでの走り

2022年4月16日、JCL開幕戦である真岡芳賀ロードレース。大会2連覇を目指す地元宇都宮ブリッツェンの選手として宮崎はスタートラインに並んだ。ひと月前の西日本チャレンジロードレースで準優勝し、移籍後初レースでのプレッシャーにも動じぬ活躍を買われての大抜擢。強風が選手を苦しめるなか、最大で2分弱開いたプロトンの先頭を任せられギャップを縮

めるルーキーにファンは沸いた。彼の強烈な牽引はファイナルラップ直前でレースを振り出しに戻すことに成功。カウンターアタックに増田成幸と小野寺玲を寄せた宇都宮ブリッツェンの大会連覇達成に貢献した。

チームにとって重要な地での勝利という功績を果たした宮崎。ここまで短期間で駆け上がった今を振り返って感じるものは？と問うと一言、「忠誠心」という言葉が返ってきた。

「津末さんにレールを引いていただいた僕の自転車競技人生。レースで戦う姿を見ていただくことで彼に恩返しできれば本望です」

機を逃さぬ活躍でプロ選手まで上り詰めた宮崎泰史。ペダルを踏んで駆け上がっていく彼の人生を追っていききたい！



Personal Data	
生年月日	1999年9月5日
身長・体重	175cm 61kg
History	
2019-2020	津末レーシング
2021	スパークル おおいた
2022	宇都宮ブリッツェン
Result	
2019年	全日本選手権 TT U23 6位
2021年	全日本選手権 TT U23 3位
2021年	JCL 秋吉台カルストロードレース 2位
2022年	西日本チャレンジロード エリート 2位

Reporter

菅 洋介

海外レースで戦績を積み、現在はJエリートツアーチーム、アヴェントゥーラサイクリングを主宰する、プロライダー&フォトグラファー。本誌インプレライダーとしても活躍